

奈文研ギャラリー (34) 法隆寺献納宝物「四十八体仏」



重要文化財：法隆寺献納宝物四十八体仏

今年の飛鳥資料館秋期特別展では、各地から飛鳥に帰る至宝をご覧にいれます。その中の名品をご紹介しましょう。

法隆寺献納宝物四十八体仏。これは、明治11年（1878）に法隆寺から皇室へ献納された宝物で、この中には飛鳥の橘寺から法隆寺へと渡っているものが含まれています。しかし、どの仏像が橘寺から移されたかは定かではありません。

今回展示する2軀は飛鳥と関連が考えられ、橘寺由来のものであれば、約930年ぶりに飛鳥へ帰ることになります。

（飛鳥資料館 成田 聖）



阿弥陀如来および両脇侍像

光背は失われるものの、三尊は完存しています。中尊は白鳳仏と考えられ、阿弥陀仏であることがわかっています。明確に判明する事例としては、わが国最古の阿弥陀仏像とされています。台座背面には、「山田殿像」の銘文が刻まれており、山田寺との関連を説く考えが出されています。中尊高さ 30.7 cm

如來立像

面長の顔立ち、厚手で長い袖のついた通肩の法衣、胸にみられる斜めの下着の縁、平行の線を繰り返して表現する衣文線などの特徴から、止利様式のものとされています。同様式でも年代的に新しいものという評価もされています。

蓮花座蓮弁には火炎紋がみられ、同様の火炎紋が渡来系の東漢氏の氏寺でもある檜隈寺の軒丸瓦にもみられ、両者の関連も説かれています。高さ 34.1 cm。